

ガソリンスタンド建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

木太町 神内城跡  
～ 第2次調査 ～

2005年12月

高松市教育委員会  
出光興産株式会社

## 例　　言

1. 本報告書は、出光興産株式会社四国支店が施工するガソリンスタンド建設工事に伴う発掘調査報告書で、高松市木太町に所在する神内城跡（じんないじょうあと）の第2次調査報告を収録した。
2. 発掘調査地ならびに調査期間は次の通りである。

調査地：高松市木太町 1339 番地 3 ほか  
発掘調査：平成 17 年 9 月 20 日～平成 17 年 9 月 23 日  
整理作業：平成 17 年 10 月 1 日～平成 17 年 10 月 31 日
3. 発掘調査及び整理作業は高松市教育委員会が担当し、その費用は出光興産株式会社四国支店が全額負担した。
4. 発掘調査は高松市教育委員会文化部文化振興課文化財専門員川畠聰が担当し、末光申正（讃岐文化遺産研究会）と大朝利和がこれを補佐した。整理作業は川畠・末光が担当した。
5. 本報告書の執筆・編集は、川畠が行った。ただし、20 頁「神内越前守清定之墓」碑文の解説・読み下しは末光が行った。また、第 15 図の作成および遺物の写真撮影は、文化財専門員大嶋和則が行った。
6. 発掘調査から整理作業、報告書執筆を行うにあたって、下記の関係諸機関ならびに方々から御教示・御協力を得た。記して厚く謝意を表すものである。（五十音順、敬称略）

香川県教育委員会、片桐孝浩、神内 敏、神内隆行、松本和彦
7. 挿図として、高松市都市計画図 2 千 5 百分の 1 「木太 2」を一部改変して使用した。
8. 本報告の高度値は海拔高を表し、方位は第 1 ～ 3 ・ 15 図が真北を、それ以外は磁北を示す。
9. 本書で用いる遺構の略号は次の通りである。

SD : 溝　SK : 土坑　SP : 柱穴
10. 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

## 目　　次

第 1 章 調査の経緯と経過	
第 1 節 調査の経緯	2
第 2 節 調査と整理作業の経過	2
第 2 章 地理的・歴史的環境	
第 1 節 地理的環境	3
第 2 節 歴史的環境	3
第 3 章 調査の成果	
第 1 節 調査の方法	5
第 2 節 調査地の概要と基本層序	5
第 3 節 遺構と遺物	7
第 4 章 まとめ	
第 1 節 遺構の変遷について	15
第 2 節 神内城跡と神内氏について	15

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査の経緯

出光興産株式会社四国支店が計画するガソリンスタンド建設工事に関し、予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会があった。予定地全域が包蔵地に該当することから、高松市教育委員会は出光興産株式会社四国支店と協議を行い、遺構の状況を確認するために、事前の試掘調査を実施することで合意した。建設工事予定地の内、もっとも掘削深度が深いタンク部分を調査対象地とし、平成17年9月8日に試掘調査を実施した。タンクの四辺に沿って設定したトレンチ調査の結果、中世～近世にかけての遺構・遺物を確認することができた。高松市教育委員会は、平成17年9月14日に香川県教育委員会に対し試掘調査結果を送付するとともに、建設工事の施工者である出光興産株式会社四国支店から提出された埋蔵文化財発掘の届出（文化財保護法93条）を進呈した。15日に香川県教育委員会より、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について、発掘調査実施の旨の回答が高松市教育委員会にあり、出光興産株式会社四国支店に伝達した。

これを受け、高松市教育委員会は出光興産株式会社四国支店と試掘調査結果をもとに協議を行った結果、建造物の基礎底面と遺構面の間に30cm以上の保護層が確保できることから現状保存とし、タンク部分の約91m<sup>2</sup>について工事着手前に発掘調査を実施することで合意し、平成17年9月15日に埋蔵文化財調査協定書を締結した。業務名は「出光ガソリンスタンド建設に伴う埋蔵文化財調査管理業務」とし、高松市教育委員会は発掘調査・整理作業の実務を行い、その費用負担および契約・支払事務については出光興産株式会社四国支店が行うこととした。

## 第2節 調査と整理作業の経過

発掘調査は平成17年9月20日から開始した。なお、今回の調査は平成12年度の第1次調査に次いで第2次調査にあたる。幸いにも好天に恵まれ、9月23日に全体の調査が終了した。整理作業は平成17年10月1日から実施し、10月31日に終了した。併行して、報告書執筆も行った。



第1図 調査区位置図（縮尺 1/2,500）

## 第2章 地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に、低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地、東側が立石山山地によって取り囲まれた東西20km、南北16kmの範囲に及んでいる。また、この平野は、讃岐山脈から流下し、北へ流れて瀬戸内海へ注ぐ香東川をはじめ本津川・春日川・新川などによって形成された扇状地でもある。調査地は、この扇状地の末端より、やや中央寄りに位置し、標高2~3mを測る。

さて、現在石清尾山塊の西を直線に北流する香東川は、17世紀初頭の河川改修によって…本化されたもので、古代以前においては香川町大野付近から東へ分岐した後、石清尾山塊の南側を回り込んで平野中央部を東北流する別の主流路があった。この旧流路は、現在では水田及び市街地の地下に埋没してしまったが、空中写真等から複数の旧河道が知られており、発掘調査によつてもその痕跡が確認されている。調査地に隣接して流れる宮川も、旧流路の名残であるが、調査地南東で条里地割に沿つて直角に折れ曲がっており、人工的な改変が加えられていることがうかがえる。

### 第2節 歴史的環境

高松平野中央部における最古の遺跡は、绳文時代草創期の有舌尖頭器が表採された大池遺跡である。しばらくの空白後、晩期の遺跡が発掘されており、木製農具が出土した林・坊城遺跡やさこ・長池遺跡、木器加工場であった居石遺跡等をあげることができる。

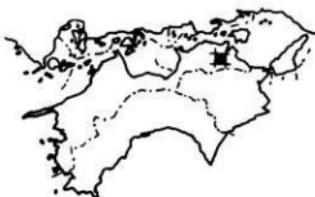
弥生時代前期に移ると、天満・宮西遺跡、汲仏遺跡で集落をめぐる環壕が発掘されるとともに、上西原遺跡、さこ・長池遺跡、さこ・長池II遺跡で不定形小区画水田が見つかっている。中期になると、さこ・長池遺跡、さこ・長池II遺跡、井手東I遺跡で住居跡、周溝墓等を伴う集落の一部が調査されているが、規模・密度とも総じて希薄である。

弥生時代後期になると遺跡は数・規模とともに爆発的に増加し、天満・宮西遺跡、凹原遺跡のように十数棟の住居跡と大量の廐棄土器を伴う集落が出現する。こうした動きの中、木太中村遺跡のような低地においても居住域が広がっている。

古墳時代では、これら弥生時代後期の遺跡が前期初頭に至るまで存続するが、その後に断絶が見られる。後期末になると、木太中村遺跡で掘立柱建物跡などが見られるようになる。一方、古墳の分布状況を概観すると、石清尾山古墳群をはじめ、主に丘陵上に古墳が築造されている。そうした中にあって、平野部の低地にされた白山神社古墳（中期、竪穴式石室）は、特異な例である。他にも、大荒神古墳をはじめ10数基の塚がかつて存在したという。

古代では条里遺構が注目される。各遺跡で、条里界線にあたる遺構を検出しており、飛鳥時代から現代に至るまで時代は様々であるが、条里地割施行が段階的に進んだことが明らかになりつつある。また、日本最古の莊園田園として名高い「弘福寺領讃岐国山田郡田園」の北地区比定地が大池周辺に存在し、やや離れて木太本村II遺跡において同時期の井戸跡が検出されている。さらに、木太中村遺跡では、古代末～中世初頭において、畿内地方からもたらされた土器が出土しており、交易を考える上で重要である。

中世では、城館跡が多数知られている。神内城跡は、平成12年度の第1次調査では、15~16



第2図 遺跡位置図

世紀の遺物を包含する幅 2.6 m の溝が検出され、城の北限を示すものと考えられている。神内城跡の東側には、土壘状の遺構が残る真鍋氏の向城跡が知られており、神内氏は十河氏方、真鍋氏は香西方の武将で、約 300 m しか離れていないところに城を築いていることが特徴的である。さらに、西へ目を転じれば、松綱城跡も存在している。また、キモンドー遺跡においては、佐藤氏の佐藤城跡の堀を検出している。

近世では、東山崎水田遺跡、川南・東遺跡、川南・西遺跡において、春日川の氾濫による洪水砂層上に営まれた集落跡が検出されている。



- |                 |             |            |              |              |
|-----------------|-------------|------------|--------------|--------------|
| 1 木太中村遺跡        | 2 川南・東遺跡    | 3 川南・西遺跡   | 4 向城跡        | 5 木太本村遺跡     |
| 6 白山神社古墳        | 7 神内城跡      | 8 木太本村II遺跡 | 9 大荒神古墳      | 10 松綱城跡      |
| 11 天崩・宮西遺跡      | 12 塚目・下西原遺跡 | 13 松綱下所遺跡  | 14 キモンドー遺跡   | 18 蛙股遺跡      |
| 15 弘福寺領田団比定地北地区 |             | 16 大泡遺跡    | 17 林下所遺跡     | 23 さこ・長池II遺跡 |
| 19 居石遺跡         | 20 井手東II遺跡  | 21 井手東I遺跡  | 22 さこ・長池II遺跡 | 28 四原遺跡      |
| 24 さこ・松ノ木遺跡     | 25 林坊城遺跡    | 26 六条上所遺跡  | 27 東山崎水田遺跡   |              |
| 29 宗高坊城遺跡       | 30 上西原遺跡    | 31 渋仮遺跡    |              |              |

第3図 周辺主要遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の方法

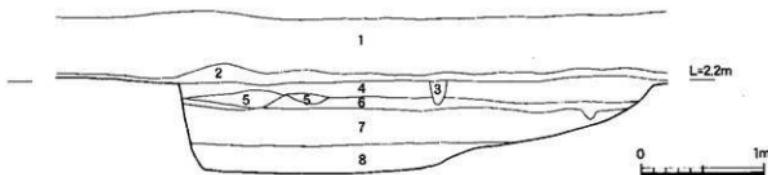
調査区は、ガソリンスタンド建設予定地の北西部分に位置し、東西約13m、南北約7mを測る長方形で、調査面積は約91m<sup>2</sup>になった。ただし、タンク埋設予定部分が、本調査時では試掘調査時より南へ約1.5mずれている。調査の方法は、最初に遺構面まで重機により掘り下げ、遺構検出にあたった。その後、順次遺構の掘削を行った。測量は平板測量による1/20図化を基本としたが、遺物の出土上状況図、十層図等は手書きによる1/10図化または1/20図化を行った。

### 第2節 調査地の概要と基本層序

当該地の調査前の状況は、かつて水田であったが、調査時には工事用花崗土が盛られていた。水田時の標高は約2.5mを測り、掘削で明らかになった遺構面の標高は約2.1mを測る。

調査区土層図は、試掘調査時の北壁において作成したものである。堆積土層は、第1層として厚さ約45cmの花崗土があり、第2層として厚さ約10cmの灰色シルト質細砂があり、その下に遺構面であるにぶい黄色シルト質極細砂が存在する。遺構面の下にも堆積層が確認でき、上から順に、暗褐色細砂、灰色シルト質極細砂、灰白色シルト質極細砂、オリーブ黒色シルト質極細砂である。これらは、遺物を含まないため時期は不明だが、第15図に示した旧河道より更に古い時期おそらく縄文時代以前の旧河道による堆積層と考えられる。

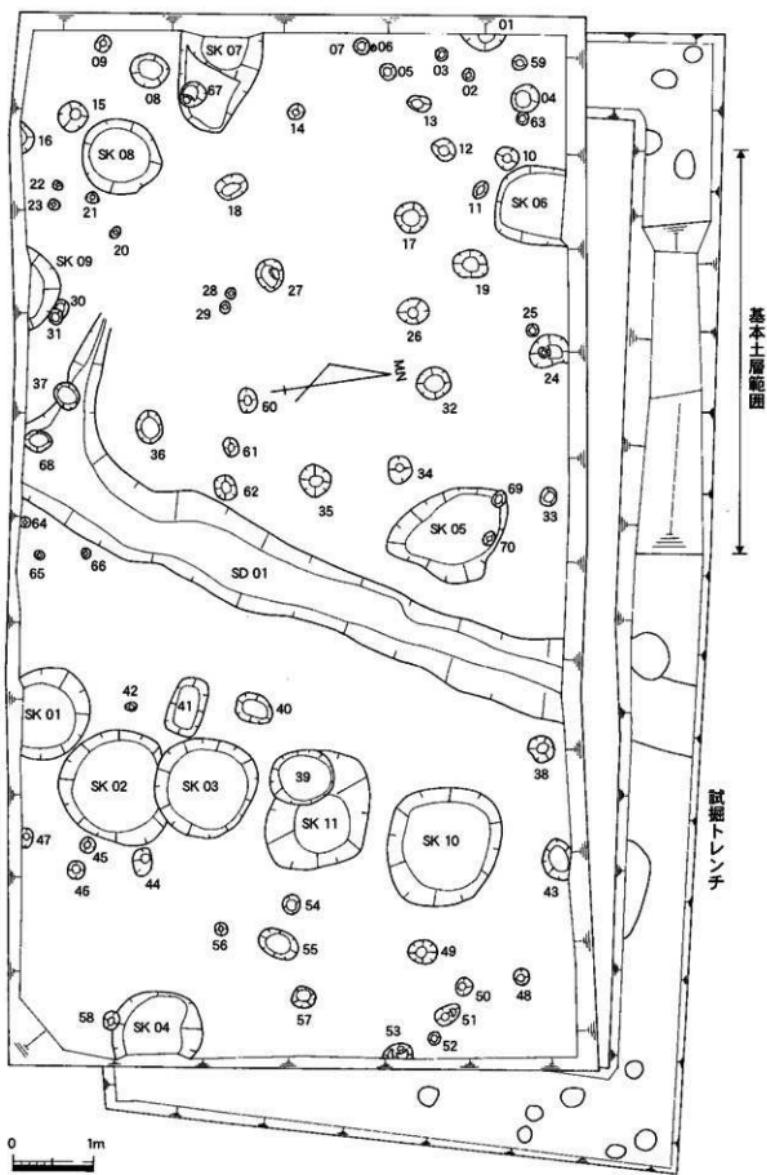
検出した遺構は、溝1条、土坑11基、柱穴70基である。出土遺物は、須恵器、土師質土器、陶磁器などコンテナ1箱分が出土した。



#### 土層名

- 1 花崗土
- 2 N6/灰色シルト質細砂
- 3 10Y5/1 灰色シルト質極細砂（柱穴堆土）
- 4 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト質極細砂（上面が遺構面）
- 5 7.5YR3/3 暗褐色細砂
- 6 5Y4/1 灰色シルト質極細砂
- 7 5Y8/1 灰白色シルト質極細砂
- 8 5Y3/1 オリーブ黒色シルト質極細砂

第4図 調査区土層図（縮尺1/40）



第5図 調査区平面図 (縮尺 1/60)

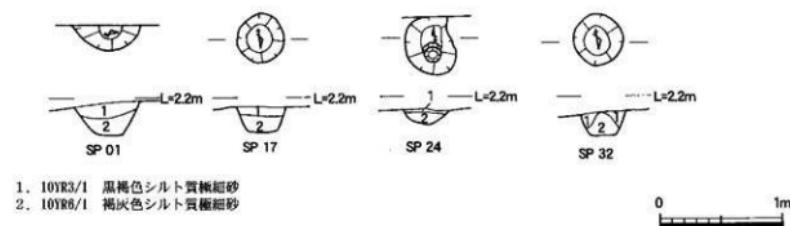
### 第3節 遺構と遺物

#### (1) 古代の遺構

##### S P O 1 · 1 7 · 2 4 · 3 2 (第6図)

調査区北西で検出した柱穴で、SP01の西半分とSP24の北端は調査区外にあたる。SP01は直径約55cm、深さ26cmを、SP17は直径38~40cm、深さ23cmを、SP24は直径38~50cm、深さ21cmを、SP32は直径40~41cm、深さ24cmを測る。断面はおおむね台形を呈するが、SP24は2段になっている。また、SP17・24・32が組み合わせて掘立柱建物跡を構成する可能性があるが、大半が調査区外となってしまうため、断定はできない。

これら4つの柱穴を他の柱穴と区別した理由は、埋土の違いにある。これら柱穴の埋土は2層に分かれ、上層が黒褐色シルト質極細砂、下層が褐灰色シルト質極細砂である。一方、他の柱穴の埋土が褐灰色シルト質極細砂の単層である。一般的に、色調が濃い方が、土中の有機物の酸化が進んでいること等から時代が古ないと判断されており、SP01・17・24・32が他の柱穴より時代が遡る可能性が高い。この場合、後述するSP04が中世前半に属することから、これら4つの柱穴は古代以前と考えられる。出土遺物がないため詳細な時期特定は不可能だが、中世~近世の遺構に混入している遺物や機械掘削時に遺構面から出土した遺物を観察すると、古代以前に遡る遺物としては7世紀前半の須恵器や9世紀の黒色土器が見られることから、これらの柱穴は7~9世紀に属する可能性が指摘できる。



第6図 S P O 1 · 1 7 · 2 4 · 3 2 平面・断面図 (縮尺 1/40)

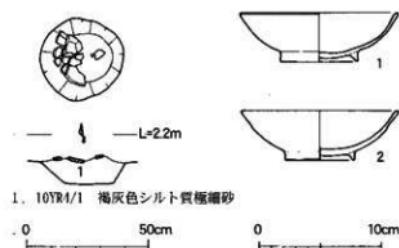
#### (2) 中世前半の遺構

##### S P 0 4 (第7図)

調査区北西で検出した柱穴で、埋土上部から土師質土器碗2点が安置された状態で出土した。いわゆる上器埋納の柱穴である。直径34cm、深さ9cmを測る。断面は台形を呈し、埋土は褐灰色シルト質極細砂の1層のみである。このSP04と組み合う柱穴は特定できなかった。

出土した土師質土器碗(第7図1・2)は、器高がやや低く、高台は断面三角形で、口縁端部を丸く仕上げている。色調は、にぶい黄橙色または灰白色である。吉備系の土器で、13世紀後半頃のものと考えられる。

他の柱穴の中にも中世前半にまで遡るものがあると想定されるが、出土遺物からは当該時期に属することが確実な柱穴は不明である。



第7図 S P 0 4 平面・断面図 (縮尺 1/20)  
出土遺物実測図 (縮尺 1/4)

### (3) 中世～近世の遺構

#### S D 0 1 (第8図)

調査区中央を斜めに横断する形で検出した溝で、幅0.9～1m、検出長7.1m、深さ20cmを測る。全体的にやや弯曲しているが、方位はおむねN-31°-Eで、溝底の標高は南側で2.5m、北側で1.9mを測ることから、南西から北東に向かって緩やかに傾いている。調査区南端付近で西へ直角に分岐する小溝がある。断面形状は底がやや窪んだ浅いU字形を呈しており、埋土は2層に分層できた。上層は褐灰色シルト質極細砂、下層は褐色シルト質極細砂であるが、下層は溝底に厚さ約5cmしか認められない。

遺物は上層から出土した。図化できた遺物は10点である。第8図3は肥前系磁器碗で、全面に施釉されているが、口縁部内面に釉が剥げている箇所が見られる。4は3と同一個体と考えられるが、接点がないため別に図化した。内外面とも施釉されているが、高台が無釉であることから、17世紀中頃までのものと考えられる。5は肥前系磁器の染付碗で、外面に草花文が認められる。17世紀後半のものか。6は陶器の唐津皿で、内面に砂目をもつ。内外面とも施釉されるが、底部は無釉である。17世紀前半のものである。7は陶器の唐津灰釉皿で、内外面とも施釉される。17世紀前半のものである。8は陶器の瀬戸美濃丸皿で、内面に直線および波状文が見られる。内外面とも施釉されるが、底部は無釉である。詳細な時期は不明である。9は備前焼擂鉢で、口縁部とくに片口の破片である。10は焙烙で、内面は刷毛調整である。17世紀後半のものか。11は茶釜の鈴部分と考えられる。12は鉄の柄鎌で、木製の柄に差し込む部分の破片である。他に土師質土器片、須恵器片が出土している。

出土遺物を概観すると、17世紀全般にわたっていることから、SD01は17世紀前半に掘削され、後半には廃絶したものと考えられる。

#### S K 0 1 (第10図)

調査区中央南端で検出した円形の土坑で、南半分は調査区外にあたる。直径1.14m、深さ26cmを測る。断面はやや丸みを帯びた台形を呈し、埋土は黄灰色シルト質極細砂の1層のみである。図化できる遺物は出土していないが、磁器片、土師質土器片が出土している。出土遺物から時期特定は難しいが、磁器片が出土していること、埋土がSK02・10・11と同じであること、これらとともに土坑群を形成することから、SK01も同じ17世紀のものと考えられる。

#### S K 0 2 (第9・10図)

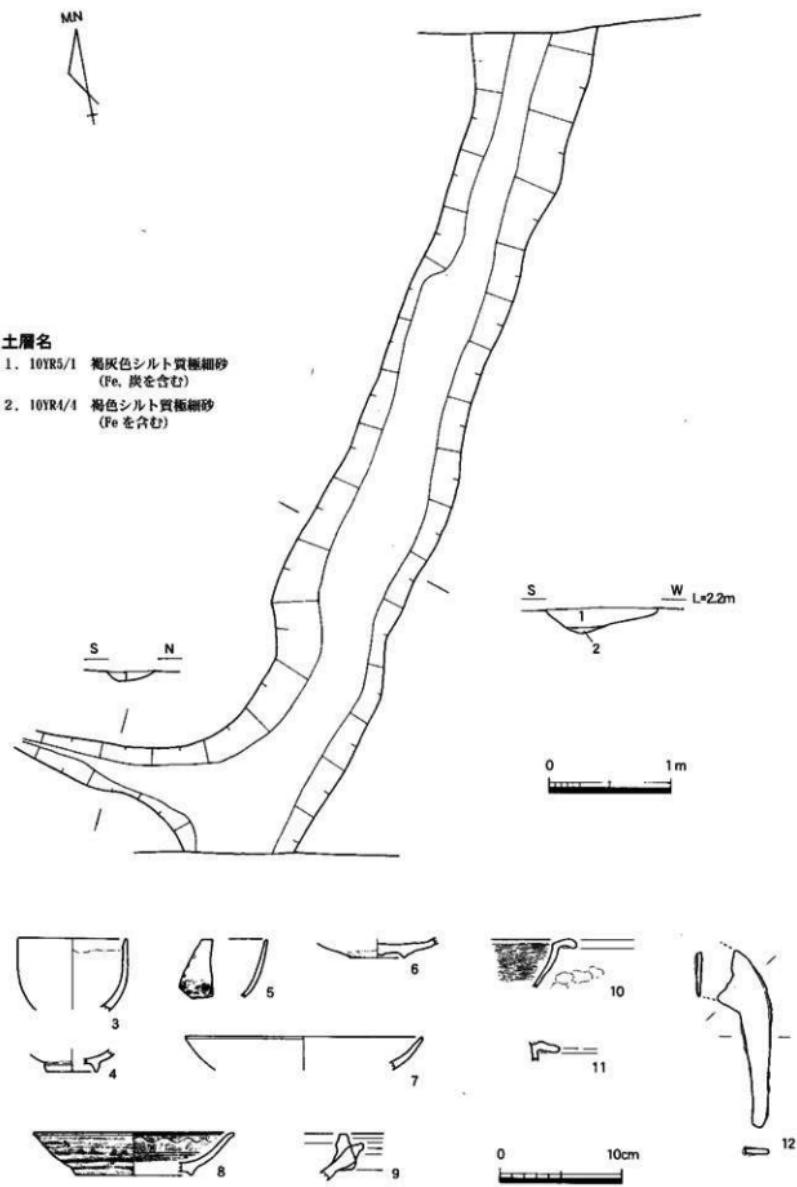
調査区中央南寄りで検出した円形の土坑で、SK03に北端を壊されている。直径1.4～1.46m、深さ36cmを測る。断面は台形を呈し、埋土は黄灰色シルト質極細砂の1層のみである。図化できる遺物として、第9図13の陶器の唐津碗が出土している。内外面とも施釉されるが、底部は無釉である。17世紀前葉のものと考えられる。他に土師質土器片、瓦器片が出土している。出土遺物が17世紀前葉であること、後述するようにSK02を含めた土坑群がSD01と関連をもつことから、SK02は17世紀のものと考えられる。

#### S K 0 3 (第10図)

調査区中央付近で検出した円形の土坑で、SK02の北端を壊して掘削されている。直径1.2～1.28m、深さ28cmを測る。断面は台形を呈し、埋土は黄灰色シルト質極細砂の1層のみである。図化できる遺物は出土していないが、土師質土器片、瓦質上器片、須恵器片が出土している。出土遺物から時期特定は難しいが、埋土がSK02・10・11と同じであること、これらとともに土坑群を形成することから、SK03も同じ17世紀のものと考えられる。

#### S K 0 4 (第9・10図)

調査区南東端で検出した円形の土坑で、東端は調査区外にあたる。SP58に南端を壊されている。直径1.1m、深さ29cmを測る。断面は台形を呈し、埋土は黄灰色シルト質極細砂の1層のみである。



第8図 SD01平面・断面図(縮尺1/40)出土遺物実測図(縮尺1/4)

図化できる遺物として、第9図14の土師質土器釜または鍋の脚部が出土している。他に磁器片、土師質土器片、須恵器片が出土している。出土遺物から時期特定は難しいが、磁器片が出土していること、埋土がSK02・10・11と同じであることから、SK04も同じ17世紀のものと考えられる。

#### SK05（第9・10図）

調査区中央北寄りで検出した不整な円形の土坑で、東に張り出している。SP69・70を壊して掘削されている。南北1.58m、東西1.14m、深さ29cmを測る。断面は台形を呈し、埋土は黄灰色シルト質極細砂の1層のみである。図化できる遺物は2点である。第9図15は陶器の唐津碗で、内面は施釉されるが、外面の底部は無釉である。17世紀前葉のものと考えられる。16は内黒の浅い黒色土器杯で、色調がにぶい橙色を呈することから、9世紀のものと考えられる。他に陶器片、土師質土器片、瓦器片、須恵器片が出土している。出土遺物が17世紀前葉であること、埋土がSK02・10・11と同じであることから、SK05も同じ17世紀のものと考えられる。

#### SK06（第10図）

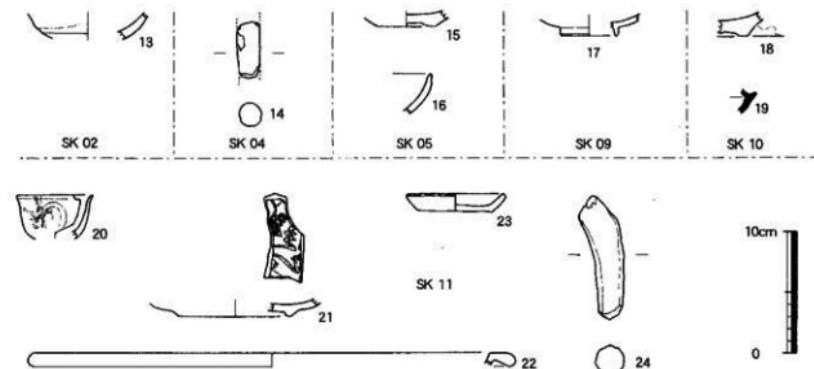
調査区北西端で検出した楕円形の土坑で、北半分は調査区外にあたる。長径83cm以上、短径97cm、深さ25cmを測る。断面は台形を呈し、埋土は黄灰色シルト質極細砂の1層のみである。出土遺物はないが、埋土がSK02・10・11と同じであることから、SK06も同じ17世紀のものと考えられる。

#### SK07（第10図）

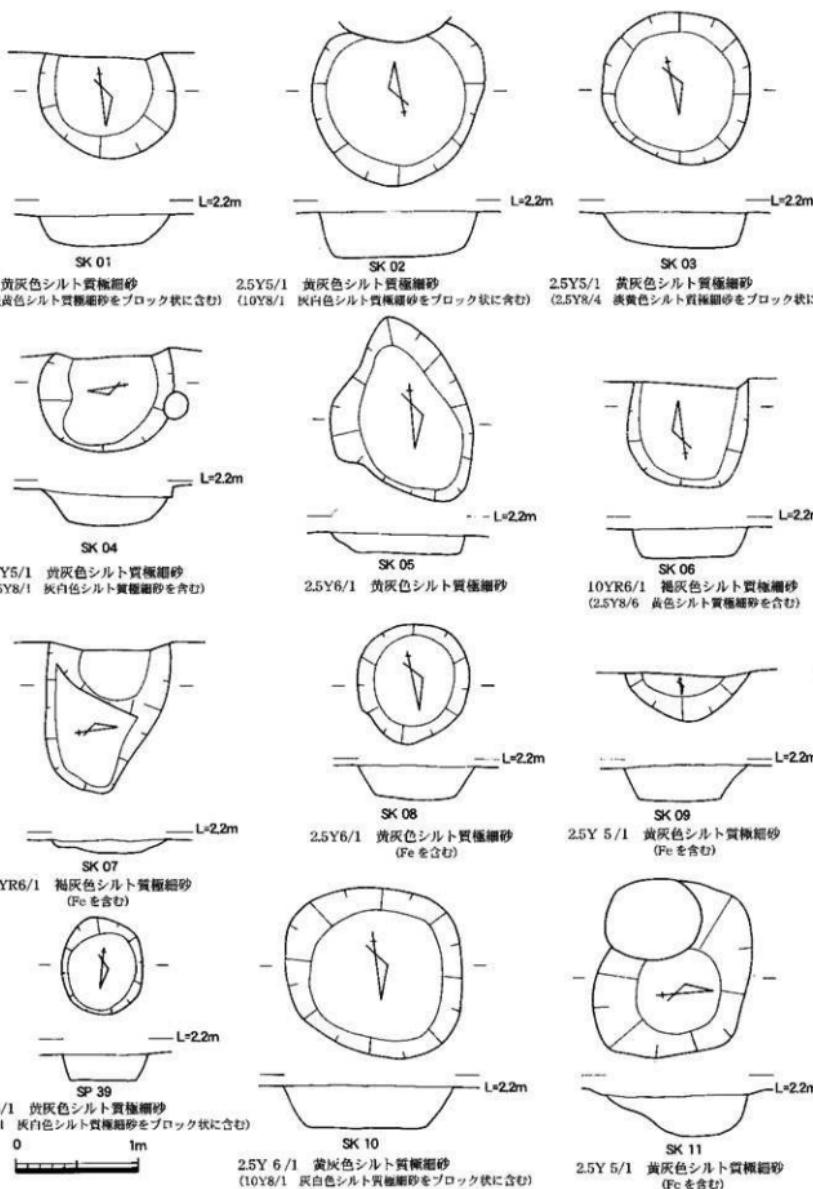
調査区南西端で検出した不整な楕円形の土坑で、西半分は調査区外にあたる。底は、2段になっている。東西方向の長径1.6m以上、短径1m、深さは浅い東側で9cm、深い西側で22cmを測る。断面は東側で不整なU字形、西側で台形を呈し、埋土は褐灰色シルト質極細砂の1層のみである。図化できる遺物は出土していないが、土師質土器片、瓦器片が出土している。時期については、他の土坑と同じ17世紀の可能性もあるが、埋土が他の土坑と違うこと、出土遺物に17世紀のものが含まれないことから、中世に遡る可能性もある。

#### SK08（第10図）

調査区南西で検出した円形の土坑で、直径90～98cm、深さ28cmを測る。断面は台形を呈し、埋土は黄灰色シルト質極細砂の1層のみである。図化できる遺物は出土していないが、土師質土器片、須恵器片が出土している。出土遺物から時期特定は難しいが、埋土がSK02・10・11と同じであることから、SK08も同じ17世紀のものと考えられる。



第9図 SK02・04・05・09～11出土遺物実測図（縮尺1/4）



第10図 SK 01～11・SP 39平面・断面図（縮尺1/40）

### SK09 (第9・10図)

調査区南西端で検出した円形の土坑で、南半分以上が調査区外にあたる。SP30・31を壊して掘削されている。直径 1.04 m 以上、深さ 29 cm を測る。断面は台形を呈し、埋土は黄灰色シルト質極細砂の 1 層のみである。図化できる遺物として、第9図 17 の土師質土器碗が出土している。他に土師質土器片、瓦器片が出土している。出土遺物から時期特定は難しいが、埋土が SK02・10・11 と同じであることから、SK09 も同じ 17世紀のものと考えられる。

### SK10 (第9・10図)

調査区北東で検出した円形の土坑で、直径 1.36 ~ 1.5 m、深さ 36 cm を測る。断面は台形を呈し、埋土は黄灰色シルト質極細砂の 1 層のみである。図化できる遺物は 2 点である。第9図 18 は陶器の唐津碗で、内面は施釉されるが、外面の底部は無釉である。17世紀前葉のものと考えられる。19 は須恵器杯で、7世紀前半のものである。他に陶器片、土師質土器片、須恵器片が出土している。出土遺物が 17世紀前葉であること、SK10 を含めた土坑群が SD01 と関連をもつことから、SK10 は 17世紀のものと考えられる。

### SK11 (第9・10図)

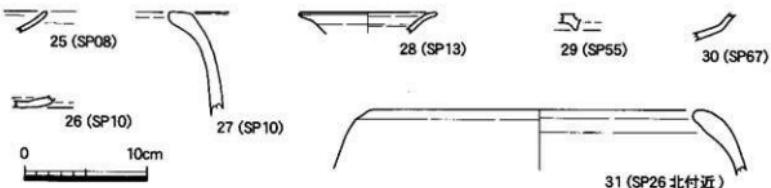
調査区中央東寄りで検出した隅丸方形の土坑で、南西隅を SP39 に壊されている。南北 1.22 m、東西 1.48 m、深さ 32 cm を測る。断面は浅い U 字形を呈し、埋土は黄灰色シルト質極細砂の 1 層のみである。図化できる遺物は 5 点である。第9図 20 は肥前系磁器の染付小杯で、外面に草花文が描かれている。全面施釉されている。17世紀後葉のものと考えられる。21 は中国産磁器の染付皿で、内外面施釉されるが、底面は無釉である。漳州窯系の製品で、17世紀前葉のものと考えられる。22 は焙烙である。23 は土師質土器の灯明皿で、17世紀のものと考えられる。24 は土師質土器釜または鍋の脚部である。他に陶器片、土師質土器片、瓦質土器片、須恵器片が出土している。出土遺物が 17世紀後葉であること、SK11 を含めた土坑群が SD01 と関連をもつことから、SK11 は 17世紀後葉のものと考えられる。

### SP39 (第10図)

調査区中央東寄りで検出した円形の遺構で、柱穴として遺構番号を付しているが、形態・大きさ等からは土坑に分類可能である。SK11 の南西隅を壊して掘削されている。直径 66 cm ~ 81 cm、深さ 24 cm を測る。断面は台形を呈し、埋土は黄灰色シルト質極細砂の 1 層のみである。図化できる遺物は出土していないが、磁器片、土師質土器片、須恵器片が出土している。出土遺物から時期特定は難しいが、磁器片が出土していること、埋土が SK02・10・11 と同じであること、17世紀後葉の SK11 を切っていることから、SP39 は 17世紀以降のものと考えられる。

### 柱穴 (SP) (第11図、第1表)

調査区全体にわたって、計 70 基の柱穴を検出した。すでに SP01・04・17・24・32・39 については報告したので、これら以外について報告する。平面形はほとんどが円形で、断面は台形を呈するものが多い。規模については第1表のとおりで、埋土は褐灰色シルト質極細砂 (10YR1/4 ~ 1/5) の 1 層のみである。現時点では、掘立柱建物跡を復元できない。



第11図 柱穴 (SP) 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)

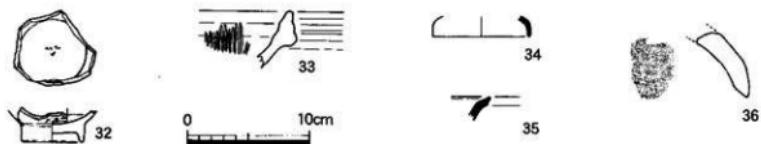
図化できる遺物が7点出土している。第11図25はSP08出土の陶器で、唐津皿である。外腹下半以外は施釉されている。17世紀でも後半のものか。26はSP10出土上で、土師質土器皿の底部である。27もSP10出土で、土師質土器の鉢である。近世のものである。28はSP13出土の陶器で、唐津溝縁皿である。全面施釉されている。17世紀中葉のものと考えられる。29はSP55出土上で、土師質上器皿の底部である。30はSP67出土の陶器で、唐津灰釉皿である。全面施釉されている。17世紀前葉のものと考えられる。31は柱穴出土ではないが、SP26北付近から出土した土師質土器の鉢である。近世のものである。他に図化できなかつたが、第1表とのおり土器片が出土している。SP08・10・13・26・67は、出土遺物から近世のものであるが、他の柱穴の時期は中世へ近世としか特定できない。

番号	法量(cm)	出土遺物	備考
	長径 幅径 深さ		
1	55 26		
2	15 9		
3	16 7		
4	34 9	土師質上器皿	
5	14 21		
6	8 6		
7	14 19		
8	21 6	施釉陶器	
9	29 42		
10	23 13	陶器、土師質土器	
11	23 13	土師質土器	
12	29 21		
13	20 12	唐津溝縁皿、土師質土器、須恵器	
14	20 17	土師質土器	
15	38 50	土師質土器、サヌカイト	
16	40 8		
17	40 23		
18	38 8		
19	43 28	土師質土器、黒色土器	
20	15 14		
21	15 4		
22	12 9		
23	14 11		
24	50 21		
25	15 9		
26	40 20	施釉土器質土器	
27	40 14		
28	13 12		
29	15 10		
30	22 11		SK09・SP31に切られる
31	19 26		SP30を切り、SK09に切られる
32	41 24		
33	24 16		
34	34 14	土師質土器	
35	40 22	土師質土器、瓦質土器、須恵器	
36	40 24		
37	34 27	土師質土器、須恵器	
38	33 23		
39	81 24	施釉土器質土器、須恵器	SKIIを切る
40	47 7		
41	74 6		
42	13 8		
43	52 26	土師質土器、須恵器	
44	35 41		
45	29 10		
46	23 15		
47	25 17		
48	21 12		
49	35 23		
50	23 18		
51	34 19	土師質土器	
52	16 3		
53	36 20		
54	24 10	土師質土器	
55	52 15	土師質土器	
56	17 15	土師質土器	
57	29 18	土師質土器	
58	22 12		SK04を切る
59	12 18		
60	30 6		
61	22 24	土師質土器、須恵器	
62	31 21		
63	11 8	土師質土器、瓦器	
64	12 8	土師質土器	
65	11 9		
66	13 7		
67	33 36	唐津灰釉皿	SK07に切られる
68	35 18		SD01に切られる
69	20 14		SK05に切られる
70	17 35		SK05に切られる

第1表 柱穴一覧表

## 遺構面等出土遺物（第12図）

機械掘削時に遺構面等から、図化できる遺物が5点出土している。第12図32は肥前系磁器の染付碗で、全面施釉されている。高台は比較的高く、外面に草花文が見られる。17世紀中葉のものか。33は備前焼鉢で、内面に捕目が見られる。17世紀中葉のものと考えられる。34は須恵器の蓋と考えられる破片である。35は須恵器蓋または瓶の口縁部と考えられる破片である。36は須恵質の丸瓦で、凹面に細かい布目が見られる。焼成不良で灰白色を呈する。



第12図 遺構面等出土遺物実測図（縮尺1/4）

番号 名前	器種	直径(㎝)			器形	色調	容二	備考
		上径	下径	高さ				
1	17世紀丁度 碗	12.6	6.4	4.0	外曲面側面テラ	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黒茶	直腹下の赤茶、 内面: 黒茶
2	土井式瓦	13.0	5.6	4.1	外曲面側面テラ	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黒茶	直腹下の赤茶、 内面: 黒茶
3	肥前焼鉢	8.8		0.0	外曲面側面 鉢	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黒茶	直腹下の赤茶、 内面: 黒茶
4	17世紀丁度 碗	4.2	0.30	0.30	外曲面: 斜めテラ、底盤(底面無)	外曲面: 染付(草花)	白磁、底: 黑茶	直腹
5	肥前燒鉢			0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁、底: 黑茶	直腹
6	須恵器 蓋	5.4		0.60	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁、底: 黑茶	直腹
7	17世紀丁度 瓦	19.6		0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁、底: 黑茶	直腹
8	17世紀丁度 瓦	16.5	9.4	3.5	外曲面: 染付(草花)、底盤(底面無)	外曲面: 染付(草花)	白磁、底: 黑茶	直腹
9	肥前燒鉢			0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
10	瓦			0.0	外曲面: 染付(草花)、底盤(底面無)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
11	瓦			0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
12	17世紀丁度 瓦			0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
13	山形燒 碗			0.0	外曲面: 斜めテラ(底盤)	外曲面: 斜めテラ(底盤)	白磁、底: 黑茶	直腹
14	17世紀丁度 碗			0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
15	須恵器 印	4.8		0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
16	黒茶丁度 碗			0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
17	土井式 瓦	4.5		0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
18	須恵器 蓋			0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
19	須恵器 蓋			0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
20	肥前燒 鉢	6.1		0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
21	中世燒 鉢	9.2		0.4	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
22	瓦	39.4		0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
23	土井式 瓦	6.9	0.0	0.0	外曲面: 染付(草花)、底盤(底面無)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
24	中世燒 碗			0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
25	須恵器 蓋			0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
26	17世紀丁度 碗			0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
27	17世紀丁度 碗			0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
28	須恵器 蓋	12.2		0.0	外曲面: 斜めテラ、底盤	外曲面: 斜めテラ、底盤	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
29	中世燒 碗	0.0		0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
30	須恵器 蓋			0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
31	17世紀丁度 碗	26.0		0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
32	17世紀丁度 瓦			0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
33	須恵器 鉢			0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
34	須恵器 蓋	6.0		0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
35	須恵器 瓦			0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹
36	瓦			0.0	外曲面: 染付(草花)	外曲面: 染付(草花)	白磁下の赤茶、 内面: 黑茶	直腹

第2表 出土遺物観察表

## 第4章 まとめ

### 第1節 遺構の変遷について

今回の第2次調査は、部分的に限られたものであったが、古代から近世に至る複数時期の遺構を確認した。そこで、時期別に遺構の変遷を報告する。なお、当該調査地から北へ約35m離れたところで実施された第1次調査の成果も合わせて報告し、当該地域の歴史的変遷をより鮮明にしていきたい。

#### 【古代】

古代に属する可能性がある遺構としては、柱穴SP01・17・24・32があり、このうちSP17・24・32が掘立柱建物跡を構成する可能性がある。出土遺物がないため詳細な時期は不明だが、中世～近世の遺構に混入した遺物や機械掘削時に出土した遺物から、7世紀前半頃と9世紀頃の2時期が挙げられる。第1次調査においても、SB-1・2と呼称された2棟の掘立柱建物跡が検出され、さらに滑石製紡錘車や須恵器杯が中世～近世の遺構に混入して出土している。さらに視野を広げると、木太中村遺跡では7世紀前半頃の集落と10～11世紀の集落、木太本村II遺跡では8世紀の井戸跡が見つかっていることから、調査地周辺では古代の集落が断続的に営まれていたと考えられる。

#### 【中世前半】

土器を埋納した柱穴SP04が13世紀後半のものであり、特定はできないが他の柱穴の一部も中世前半に該当すると考えられる。更に土坑SK07が中世前半もしくは後半に属するものと考えられる。第1次調査では、当該期の遺構・遺物は希薄である。ただし、木太中村遺跡では、大型の掘立柱建物をもつ13～14世紀の集落跡が検出されており、中世前半においても調査地周辺では集落が営まれていたと考えられる。

#### 【中世後半】

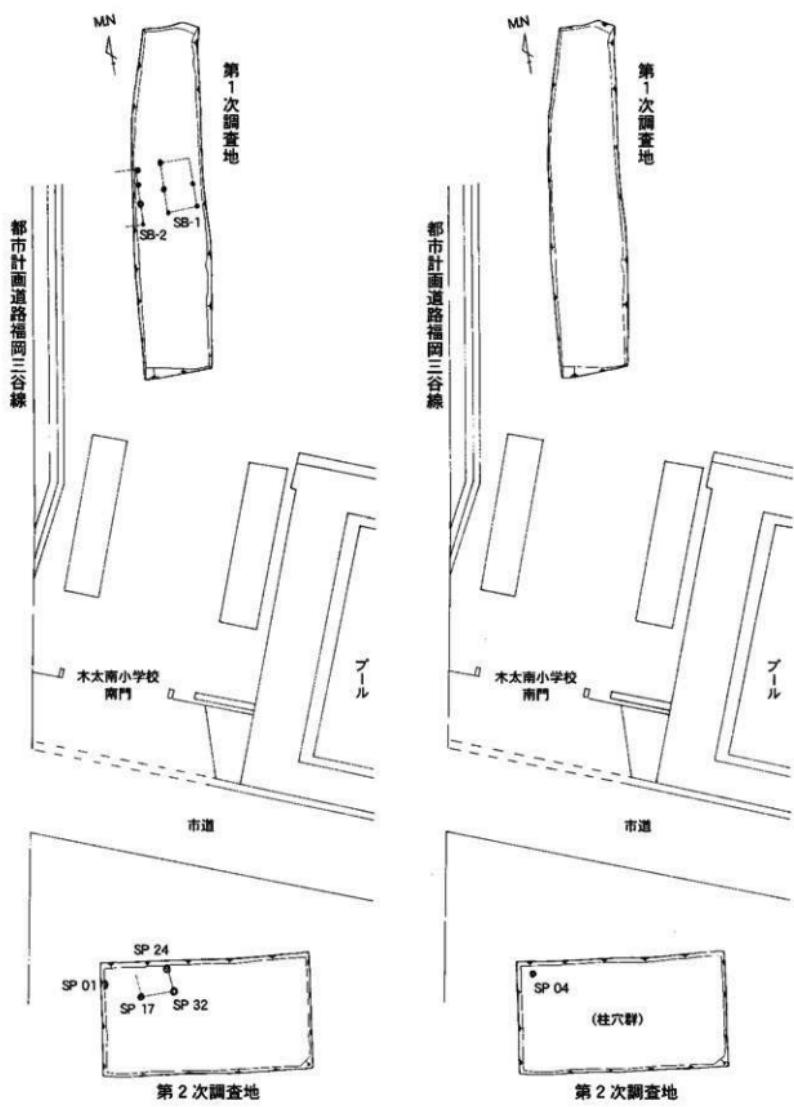
神内城が営まれた時期である。今回の調査地では、柱穴の一部が当該期に属する可能性はあるが、遺物は少量である。一方、第1次調査では、城館の北限を示すと考えられる溝SD-7を初め、溝SD-1や多数の柱穴群とともに、遺物も一定量出土している。このことから、第1次調査地は掘立柱建物を中心とした居住域であり、今回の調査地は居住域の縁辺部にあたると考えられる。このことを想定される神内城の城域に反映させると、第1次調査地は城内の北側にあたり、今回の調査地は城内の中央付近に位置することから、城内の北側に居住域を配置していた可能性を指摘できる。

#### 【近世】

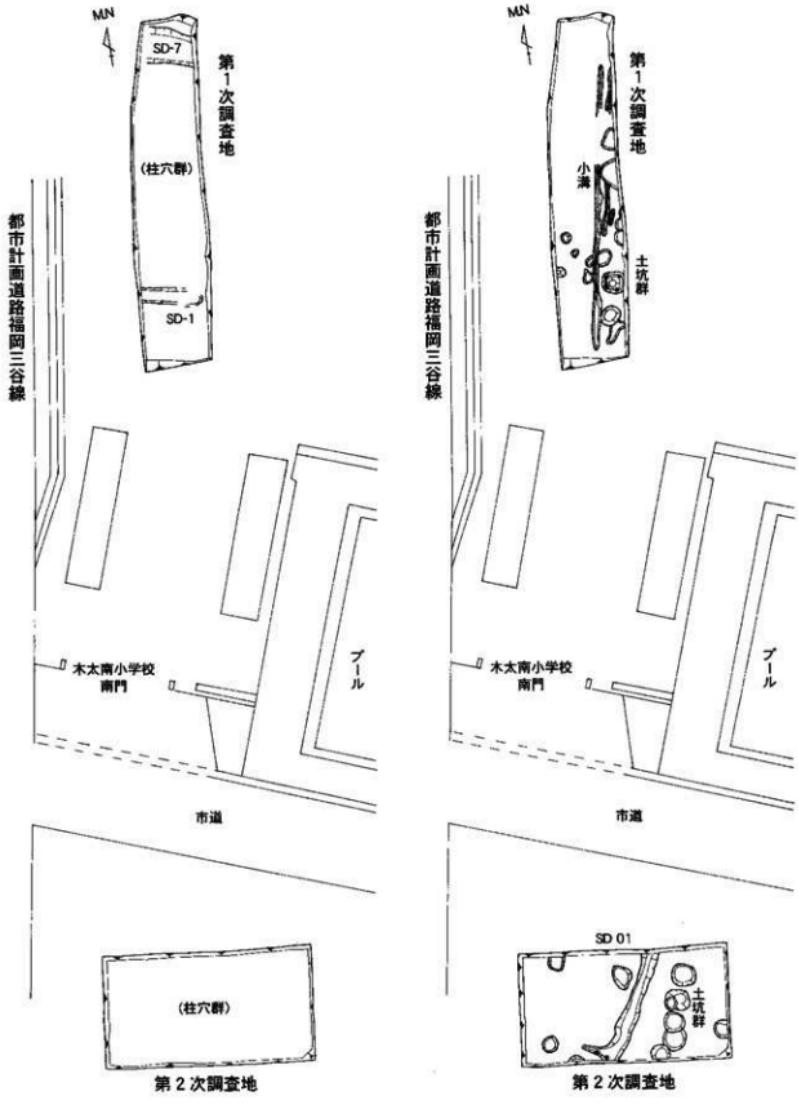
神内城が廃城した後のものである。近世の遺構は、更に17世紀と18世紀の2時期に分けることが可能である。17世紀のものは、今回の調査地では溝SD01や土坑群であり、第1次調査でも土坑群が17世紀のものと考えられる。溝に沿って上坑が連なる形で掘削されていることが特徴であるが、その用途は特定できない。次いで18世紀のものは、第1次調査地で検出した南北方向の小溝のみであり、これ以後の遺構は確認することができない。

### 第2節 神内城跡と神内氏について

神内城跡については、江戸時代に書かれた『全譜史』(中山1826)や『讃陽古城記』(中山1846)に名前や所在地が記載されるとともに、『讃岐国名勝図会』(柳原1853)の挿絵にも現推定地付近に「神内城跡」の名が見え、古くから知られていた。現代に至り、研究者の目で所在地を推察したのは秋山忠氏である。それは「城屋敷」の地名が残り、城主神内清定の墓が近くにあり、宮川が条里地割に沿って不自然に直角に折れていることから、ちょうど今回の調査地付近に神内城が存在したと推測された。さらに、



第13図 遺構変遷図① (縮尺 1/300)



【中世後半】

【近世】

第14図 遺構変遷図② (縮尺 1/300)

宮川を城の南限・東限として 150 m四方の城域を推察されている(秋山1982<sup>a</sup>)。こうした中、初めての発掘調査が平成 12 年度に実施され、検出された堀跡と考えられる溝や、1962 年の航空写真を使った地形分析から、宮川を城の南限・東限とした 120 m四方の城域に第 15 図のように修正された(大塚 2001)<sup>b</sup>。さらに、今回の調査により城内の居住域の範囲が明らかになりつつあり、今後の調査事例の増加により構造解明が更に進むものと考えられる。

一方、神内城の城主であった神内氏についても、先に紹介した歴史書で触れられている(19 頁)。細部に違いがあるが要約すると、「天文天正年間(1532~92 年)に、神内右京進景之と清定の父子があり、木太に 700 石と西植田に 300 石を領していた。神内家は、三谷・神内・十河氏の 3 人兄弟で、神櫛王の末裔である。」となっている。

さらに、神内城跡より西へ約 200 m離れた所(第 1 図)に建っている神内清定の墓には、より詳しく述べ神内氏について記されている。墓石の四面に文字が刻まれており、今回、墓を管理している子孫の方の御好意により、その内容を 20 頁に掲載した。要約すると、「名は清定、神内越前守と称し、神櫛王の末裔である。神櫛王の末裔は讚岐に住み、後に植田・神内・三谷・十河の 4 氏となり、清定もその一つである。清定の父は右京進景之といい、千石を領し、神内・木太の 2 村に城を構え住んだが、清定の時に木太に住み・七百石を領した。天正 10 年(1582)に長曾我部元親が兵を率いて攻めて来た時には、他の氏族とともに十河城に籠もって奮戦した。いよいよ落城の際には城外へ逃げ延びられたが、領地を失ってしまった。本山村に移り住んだが、その跡地を今も地元の人は神内大屋敷という。後に木太城跡に住んだが、慶長 4 年(1599)3 月 23 日に亡くなったので、薬師堂の近くに葬られた。(略)」とあり、寛政 9 年(1797)の年号が見られる。

これらに補足を加えると、神内氏はもともと西植田を拠点としていた氏族で、西植田にも同名の神内城跡(別名、台山城跡)という山城があり、その麓には鎌倉時代後期のものを含む五輪塔群や宝篋印塔で構成される墓地や「城屋敷」といった地名が残されている。源平合戦にまで遡る人物の名が見られ、古くから西植田で活躍していたようである。しかしながら、天文天正年間に神内景之と清定が木太に居を構えていたことから、西植田より木太に移り住んだことが伺える。これについては、当時、高松平野に大きな勢力を有していた香西氏に属する宮脇氏の松縄城と真鍋氏の向城の間に、神内城が割って入っていることから、高松平野南東部に勢力を有していた十河氏が香西氏への牽制として神内氏を木太に住ませたと推測されている(秋山1982<sup>a</sup>)。特に向城とは約 300 m の距離しかなく、また城主である真鍋祐主は勇猛果敢な武将として知られており、かなりの緊張関係があったと推察される。

しかしながら、木太の神内城や神内景之と清定については、西植田に残る『神内氏系図考記』などの文書には触れられていない。さらに、天正年間にいた西植田の武将として神内新之守重長の名を地元では伝えている。一方、清定の墓碑にも、景之の時には西植田・木太の 2 村にいたが、清定の時に木太のみに住んだと記されている。このことは、西植田の神内氏から景之・清定の一党が木太に拠点を移したが、西植田においても神内氏はそのまま残っていたことを示している。しかしながら、神内氏一族の結束は固いようで、長曾我部元親による十河城攻めには一緒に防戦したと考えられる。

西植田の神内家墓地石塔群の調査(藤原・川端 2003)に引き続き、今回の「神内越前守清定之墓」の碑文によって、中世の有力氏族であった神内氏の一端が明らかになった。今後も神内氏を含め激動の戦国時代を生き抜いた氏族の資料が蓄積されるとともに、発掘調査を通して、より具体的な郷土高松の歴史が復元可能になるのである。

## 参考文献

- 秋山忠 1982 『古城跡を訪ねて』高松市の文化財・第 7 摘、高松市歴史民俗協会・高松市文化財保護協会発行  
人島和則 2001 『高松市内遺跡発掘調査概報—平成 12 年度国庫補助事業—』高松市教育委員会  
香川県教育委員会 2003 『香川県中世城跡詳細分布調査報告書』  
柳原並風、藍水 1553 『讃岐國名勝圖会』  
片山勝次郎 1846 『讃岐古城記』(了香川叢書) 第二巻所取(1941)  
中山城山国証言 1828、青井常太郎校訂 1937 『国証全漢史』藤田書店  
藤澤典彦、川畑聰 2005 『神内家墓地石塔群』高松市教育委員会  
山田秀三吉編 1940 『木太郡誌』木太郡教育会発行

【全讀史】

「神内城 西原田村に在り (盛) 天文大正の際、

神内右京進景之及び右京進清定ありき。食  
禄は神内に西原田の内三百石、木太村に七百

石 物計千石ありき。」

「神内城 木太村に在り 神内右京進景之家之  
のちか、西原田より移り來り、居を此にト  
せり。其の子清定之に居りき。昭代に及び、  
其の子孫五右衛門、惣十郎、相續きて其の  
墟に居りき。」

【讀陽古城記】

「東植田村神内之城跡 神内左京之進、木太  
ニテ高七百石、西植田ニテ高三百石凡千  
石。神内家、三谷氏・神内氏・十河氏三人  
兄弟ナリ。神櫛王末葉ト云。細川清氏に與  
カス。」

「木太村城屋敷 神内右京進居。(延) (一名  
神内城。)」

【讀岐國名勝圖会】

「神内城跡 同所(東植田村)にあり。神内右京進  
景之その子清定等ここに居れり。植田の氏  
族にて西植田村千石ばかりの領主なり」

「神内城跡 同所(木太村)にあり。神内左京進  
景之これに居たり」

「神内清定の墓 同所(木太村)、薬師堂の東北  
にあり」



第 15 図 神内城跡および周辺旧地形図 (縮尺 1/2,500)

## 〔神内越前守清定之墓〕碑文

### 〔読み下し文〕

#### 〔原文〕

《正面》(背面)

#### 神内越前守清定之墓

#### 《向つて左侧面》(背面)

君諱清定稱神内越前守其先神櫛王之

裔ナリ。居シテ(居リテ)讃州ニ、爲ル植田神内二谷一河ノ四氏ト。

居ス君ハ其一二焉。父ハ曰フ(ヒ)右京進景之ト、食邑八千石ナリ。

城邑ヲ于ニオイテ神内木太一邑居スレ之ニ至リ君ノ時ニ居ス木

#### 《背面》(北面)

君諱清定稱神内越前守其先神櫛王之  
裔居讃州爲植田神内三谷十河四氏居  
君其一焉父曰右京進景之食邑千石今  
城邑于神内木太一邑居之至君時居木

太邑二。食邑七百石。天正十年長曾我部元

親率兵來攻ス。十河城ニ與シテ諸子ニ、同ニ堅ク守リテ不ズレ  
降ラ。後二兵不ズレ利城卒ル所於城中逃去ス。於テ是ニ君

親率兵來攻十河城居與諸子同堅守不  
降後兵不利城卒所於城中逃去於是君

失其食邑移居本山邑其趾今尚存土人

稱之曰神内大屋敷後再居木太城趾慶

長四年己亥三月廿二日没葬于同邑墓

#### 《向つて右侧面》(東面)

師堂側。法名真澄院殿釋道雲大居士。子

孫ハ至ル今ノ六世清保ニ。皆其次也ト云フ。

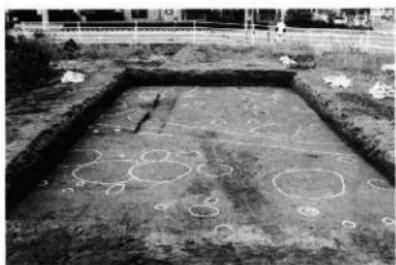
寛政九年丁巳(ていし)九月

同邑處士増田雅忠謹撰

《向つて右侧面》(東面)  
師堂側法名真澄院殿釋道雲大居士。子  
孫至今六世清保皆其次也云

寛政九年丁巳(ていし)九月

同邑處士増田雅忠謹撰



遺構検出状況（東から）



調査区全景（南西から）



調査区全景（東から）



基本土層堆積状況（南から）



調査区東半（南から）



S P 0 4 土器出土状況（南から）



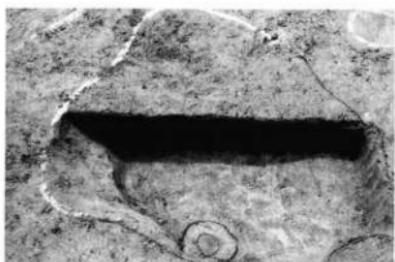
調査区西半（南から）



S D 0 1 断面（北から）



SK01断面（北から）



SK05断面（北から）



SK02断面（南から）



SK06断面（南から）



SK03断面（北から）



SK07断面（東から）



SK04断面（西から）



SK08断面（北から）



SK 09 断面（北から）



真鍋祐主墓（南から）



SK 10 断面（北から）



土師質土器椀（1）



神内越前守清定之墓（南から）



土師質土器椀（2）



向城跡（南から）



土師質土器灯明皿（23）

# 報告書抄録

ふりがな	じんないじょうあと						
書名	神内城跡						
副書名	ガソリンスタンド建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第89集						
編著者名	川畠聰						
編集機関	高松市教育委員会						
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2636						
発行年月日	西暦2005年12月28日						
ふりがな 所収遺跡名	しよごうち 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
じんないじょうあと 神内城跡	かがねじょうあと 香川県 たかまつし 高松市 きたちよう 木太町	37201	34° 19' 09"	134° 04' 26"	2005.9.20~23	91 m <sup>2</sup>	ガソリン スタンド 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
神内城跡	城館	古代	柱穴	須恵器、黒色土器			
		中世	柱穴、土坑	土師質土器			
		近世	溝、土坑、柱穴	陶磁器、土師質土器、金戻器			
要約	神内城は、天文・天正年間に神内景之・清定父子が居城としたことで知られている。平成12年度に統いて2回目の調査を行った。神内城に直接関わる遺構以外に、築城以前にあたる古代および中世前半の遺構や、廃城直後の近世の遺構を検出した。これらにより、調査地周辺の土地利用の変遷を知ることができた。						

## 神内城跡

ガソリンスタンド建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成17年12月28日

編集 高松市教育委員会  
高松市番町一丁目8番15号  
発行 高松市教育委員会  
出光興産株式会社  
印刷 有限会社 中央ファイリング